世帯変化の有無と高齢者の主観的幸福感と満足感の関連

― 6年間の推移を通して ―

平　賀　明　子

目　次

Ⅰ．問題の所在
Ⅱ．調査の概要および分析の方法
Ⅲ．Ⅲ．分析結果
Ⅳ．結論と今後の課題

Ⅰ．問題の所在

高齢化が一段と進む今日において，高齢者がいかに幸福な老いを迎えるかは個人の側の関心であると同時に，社会の側の要請であるという見方もある（小田，2004)。小田によれば（2004)，「その関心と要請とは，高齢者が社会の負担にならないように命尽きるまで自立した生活を送り，社会に有用な存在であり続けてもらいたい」というものである。サクセスフル・エイジングの概念は，このような要請のなかで「普通の老い」と区別され，老年学を専門とする領域で1960年以降研究がすすめられてきた。[(1)]

サクセスフル・エイジングの測定についてはさまざまな議論がなされているが，改訂PGCモラール・スケール（Lawton M.P.，1972：1975）はサクセスフル・エイジングを測定する一つとして開発され精錬されてきた。たとえば，「モラールが高い」という意味は，１）自分自身について基本的な満足感をもっている「心理的安定」，２）環境の中に自分の居場所があるという感じをもっている「孤独感・不満足感」，３）努力しても動かし難いような事実を受容できる「老いに対する態度」の３つから成り立つ（古谷野，2003)，とされている。

改訂PGCモラール・スケールは別名，主観的幸福感とも言われ，主観的幸福感が健康状態と密接に関連し，男性では健康状態に加えて友人との接触頻度が，女性は親戚との接触頻度と世帯収入が関連しているとの知見（直井，2001）もみいだされた。しかし，直井（2001）の指摘にあるように，幸福感については横断的な研究が多く，個々の対象者の変化を詳細に述べるための縦断的な研究は少ない。また幸福感は時間的経緯のなかで低下するのか，あるいは上昇するのか，子どもが結婚や職場の移動，子どもとの同別居は幸福感にどう影響するのかなど，世帯の変化に関連して研究されたものは少ない。

世帯でみれば北海道は全国に比べて夫婦のみ世帯と単独世帯の割合が増加し，65歳以上の親族のいる三世代同居が急激に減少していることが明らかにされている(布施，2002)。

三世代同居の形態をとらない家族が増えるなかで幸福な老いをどのようにイメージし，実態のあるものにしていくのか。それを明らかにすることが本稿の目的である。

Ⅱ．調査の概要および分析の方法

本稿は，1994年夏に札幌市で行った「高齢

キーワード：世帯変化の有無，高齢者，主観的幸福感と満足感

者の社会的ネットワークに関する調査」の2000年７月～８月実施から得られたデータ分析を目的とする。[2] 追跡調査から得られた対象者は69名であり，そのうち子どものいない11名を除く58名（男性30，女性28）を分析対象とした。はじめに，統計的な手法によって主観的幸福感（改訂 PGC モラール・スケール Lawton，1972:1975）と満足感[3]の分析を行い，つぎに，事例的な手法によって対象者一人ひとりを世帯変化の有無別に詳細に調べ，最後に，事例的な手法と統計的手法の双方を用いることによって，主観的幸福感が世帯変化の有無によってどのような影響を受けたかを検討する。その際，実際の健康状態および友人数の変化も考察に加え，評価と実態のズレを検討に加えた。

Ⅲ．分析結果

１．主観的幸福感の尺度構成と健康，友人満足の相関

主観的幸福感と呼ばれる PGC モラール・スケールは，その後改訂 PGC モラール・スケールとして概念化され，精錬されてきた（Lawton，1972:1975）。本稿では改訂 PGC モラール・スケール17項目[4]の因子構造の特性をみるために1994年と2000年のデータを別々に因子を特定するあるいは特定しないなどの分析を試みた（主成分分析，バリマックス回転）。しかし異なった因子解[5]しか得られなかったため，２時点で合成した変数[6]を Lawton（1972）の文献に従って尺度化を行った。その後，尺度として比較的信頼性を有していると思われた３つの尺度「老いに対する態度」（α＝.72），「心理的動揺」（α＝.71），「孤独感・不満足感」（α＝.62）を選び，健康満足と友人満足との関連を相関分析によって検討した。これら３つの尺度の妥当性については先行研究（小田，2004：古谷野，2003）によって支持されている。

表１に示すように，尺度Ⅰ「老いに対する態度」は尺度Ⅱ「心理的動揺」（r=.48 p<.001）尺度Ⅲ「孤独・不満足」（r=.43 p<.001），健康満足（r=.45 p<.001），友人満足（r=.37 p<.01）のいずれとも強い相関がみいだされた。尺度Ⅱ「心理的動揺」は尺度Ⅲ「孤独・不満足」（r=.54 p<.001），健康満足（r=.49 p<.001）とのあいだに強い相関があったが，友人満足（r=.23 p<.10）とは弱い関連しかみいだされなかった。尺度Ⅲ「孤独・不満足」は健康満足と友人満足とのあいだに強い相関（それぞれr=.43 p<.001とr=.44 p<.001）があった。健康満足は友人満足とのあいだ強い相関（r=.52 p<.001）がみいだされている（表１）。

表１．主観的幸福感３つの尺度と健康、友人満足の相関　n＝69

	尺度Ⅰ 老いに対する態度	尺度Ⅱ 心理的動揺	尺度Ⅲ 孤独感・不満足感	健康満足	友人満足
尺度Ⅰ 老いに対する態度	1.00				
尺度Ⅱ 心理的動揺	0.48 ***	1.00			
尺度Ⅲ 孤独感・不満足感	0.43 ***	0.54 ***	1.00		
健康満足	0.45 ***	0.49 ***	0.43 ***	1.00	
友人満足	0.37 **	0.23 +	0.44 ***	0.52 ***	1.00

***p<.001　**p<.01　*p<.05　+p<.10

２．世帯変化の有無別，主観的幸福感と健康満足と健康状態，友人満足と友人数

本節では主観的幸福感の３つの尺度に焦点をあて，時間的経緯によって対象者の評定がどのような変化したかを検討する。さらに，３つの尺度と関連のあった健康満足と友人満足に実際の健康状態および友人数の変化を加え，評定と実態のズレの有無を検討に加えた。

主観的幸福感と満足感の高低については，1994年調査の平均を基準にして2000年調査で上がっていれば上昇，下がっていれば低下とした。はじめに，世帯変化なし対象者については主観的幸福感３つの尺度が全体の平均よりも高い対象者と逆に低い対象者の比較を行

いその違いをもたらす要因を検討した。つぎに，幸福感３つの尺度のうちどの尺度が２時点で上昇あるいは低下したかを世帯別に検討する。その際，全体の平均からの差ではなく，1994年時点からの差をみる。さいごに，世帯変化あり対象者全員の幸福感と満足感の高低にかかわる要因を詳細に検討する。

2-1. 世帯変化なし高齢者の幸福感３尺度と満足感および健康状態と友人数との関連

表２に示すように，主観的幸福感３つの尺度がともに全体の平均以上および２時点間で上昇および低下したにもかかわらず平均以上なのは夫婦のみ世帯の男性に多い（No10～

表２．世帯変化なし高齢者の主観的幸福感，健康満足と健康状態，友人満足と友人の変化

No ・性別	世帯の型	age	尺度Ⅰ 老いに対する態度	尺度Ⅱ 心理的動揺	尺度Ⅲ 孤独・不満足	健康満足	健康状態 の変化	友人満足	友人数 の変化
全体平均		74.6	1.56→1.54	1.72→1.77	1.78→1.86	3.17→3.21	1994→2000	3.02→2.90	1994→2000
1.男	単独世帯	69	1.50→1.75	1.40→2.00	1.67→2.00	3→4	健康	4	1→10
2.女	単独世帯	66	1.50→1.75	1.40→1.75	1.33→2.00	2→3	非健康→健康	4→3	0→15
3.女	単独世帯	78	1.75	1.80→2.00	2.00	4	健康	4	14→6
4.女	単独世帯	67	1.00→1.50	1.60→2.00	1.33→2.00	2	健康→非健康	3→4	5→4
5.男	単独世帯	78	1.67→1.33	2.00	1.33→2.00	3	健康→非健康	3	1→3
6.女	単独世帯	69	1.50→1.00	1.40→1.60	1.67→2.00	3→2	非健康	4→3	7→5
7.女	単独世帯	70	2.00→1.50	1.80	1.67	4→3	健康	4→3	6→9
8.女	単独世帯	75	1.00	1.80	1.67	2	非健康	3	5→8
9.男	単独世帯	86	1.33→1.00	1.80→1.68	1.33→1.00	4→3	健康	2	0
10.男	夫婦のみ世帯	74	1.50→1.67	1.60→2.00	2.00	4	健康	4→3	8→9
11.男	夫婦のみ世帯	70	2.00→1.75	1.80→2.00	1.67→2.00	3→4	健康	3→4	12→9
12.男	夫婦のみ世帯	72	2.00	1.80	2.00	4	健康	4	10→20
13.男	夫婦のみ世帯	74	2.00→1.75	2.00	2.00	3	非健康	3	14→4
14.男	夫婦のみ世帯	69	1.25→2.00	1.60→2.00	2.00	4	健康	3→4	23→20
15.男	夫婦のみ世帯	77	2.00	2.00→1.80	2.00	3	健康→非健康	4→3	5→7
16.男	夫婦のみ世帯	74	2.00→1.75	2.00	2.00	3	非健康	3	7→4
17.男	夫婦のみ世帯	70	2.00	1.60→1.80	2.00	4	健康	4	5
18.男	夫婦のみ世帯	69	1.75→1.67	1.80→2.00	2.00	4	健康	4→2	5
19.男	夫婦のみ世帯	69	1.25→2.00	2.00	2.00	4	健康	4	15→24
20.女	夫婦のみ世帯	69	1.75→2.00	1.80	2.00	2→3	非健康→健康	4→3	0→4
21.女	夫婦のみ世帯	67	2.00	1.80→2.00	2.00	4	健康	4	7→10
22.男	夫婦のみ世帯	81	1.75→1.50	1.50→1.80	1.84	3	非健康	3→Na	6→8
23.男	夫婦のみ世帯	83	1.50	1.80→2.00	2.00	3	非健康→健康	2→3	0
24.女	夫婦のみ世帯	74	1.75→2.00	1.60→1.40	2.00	3→4	健康	4	7→9
25.男	夫婦のみ世帯	77	1.00→1.25	1.20→1.80	1.67→2.00	4	健康	4	12→9
26.女	夫婦のみ世帯	67	1.50→1.75	1.80→1.33	1.67	3	非健康	3→4	4→8
27.女	夫婦のみ世帯	68	1.25→1.00	1.80→1.60	2.00	3→2	非健康	3	1→0
28.男	夫婦のみ世帯	69	1.50	1.60→1.20	1.67	1→3	健康→非健康	4→3	13→6
29.男	夫婦のみ世帯	81	1.75→1.00	1.40→1.60	2.00→1.67	3→2	非健康	3	13→14
30.男	夫婦のみ世帯	72	1.75→1.00	1.60→1.20	1.33→1.00	3	健康	2→3	3→9
31.女	夫婦のみ世帯	73	1.25→1.50	1.60	1.33→1.67	2→4	健康→非健康	3→4	4→5
32.女	未婚長女と同居	69	1.00→2.00	1.40→2.00	2.00	4	健康	4	10→5
33.男	未婚長女と同居	80	1.75→1.25	2.00	2.00	4	健康	4	0→8
34.男	未婚長女と同居	77	1.50→1.25	1.80	2.00	3	非健康	4	10→4
35.男	未婚長女と同居	68	1.25→1.00	2.00→1.40	2.00	4→3	健康	4→3	12→3
36.男	未婚次男と同居	70	1.25→1.00	1.80	1.33→1.67	3→4	健康	3	3→6
37.男	既婚長男と同居	88	1.67→2.00	2.00	2.00	4→3	非健康	4→3	0
38.女	既婚長男と同居	71	2.00→1.67	2.00	2.00	3	健康→非健康	3	6→5
39.女	既婚長男と同居	70	1.75	2.00→1.40	1.67→2.00	3→4	健康	3	6→9
40.女	既婚長男と同居	67	1.25→1.50	1.20→1.60	1.67	3→2	非健康	4→2	1→0
41.男	その他の世帯	75	1.50→1.00	2.00→1.80	1.67→2.00	4→3	非健康→介助	3	5→3
42.女	その他の世帯	66	1.00→1.25	1.20	1.33→1.00	1	入院中	2	8→3

注1：夫婦のみ世帯女性1名は2000年調査で娘死亡による子ども無しに変化したため、分析から除いた。
注2：単独世帯No1.とその他の世帯No41.は内縁関係にある女性と同居，夫婦のみ世帯No12.とNo19.は娘と二世帯同居，No9.は妻が長期の病気療養のため単独世帯と認識し，その他の世帯No42.は入院中で週末だけ自宅療養している。
注3：矢印→は94年から2000年の主観的幸福感，健康満足と健康状態および友人満足と友人数の変化を示す。
注4：No22.の2000年Naは無回答であったことを示す。

No21)。かれらの健康満足の評定と実際の健康状態は概ね変化がみられないが，友人満足の評定は変化し，友人数も多い傾向にある。

他の世帯では，単独世帯９名中３名（No1～No3)，未婚子との同居世帯５名中１名（No32)，既婚子との同居世帯４名中１名（No37）に同じ傾向がみられた。

一方，主観的幸福感３つの尺度が全体の平均よりも低いか２時点間で上昇したにもかかわらず平均以下なのは単独世帯９名中１名（No9)，夫婦のみ世帯22名中４名（No28～No31)，既婚子との同居世帯４名中１名（No40)，その他の世帯２名中１名（No42）と全体の12%を占めている。個別にみてみると，単独世帯 No９は男性で86歳,友人満足が低く，友人もいない。夫婦のみ世帯 No28は69歳の男性だが，２時点間で健康状態が健康から非健康に変化し,友人数も減少した。同じく男性 No29は81歳と高齢である。健康状態は２時点とも非健康だが友人数は多い。72歳の男性 No30は２時点間に３つの尺度すべてが低下した。しかし，健康であり友人数は増加している。No31は73歳の女性である。２時点間で健康状態が健康から非健康に変化したが，評定は「どちらかといえば満足」から「ひじょうに満足」に変化し実態と評定にズレがある。既婚子との同居世帯 No40は67歳の女性である。２時点ともに非健康で友人はなく，健康および友人満足の評定も低下している。その他の世帯 No42は66歳の女性である。入院中で友人数も減少し,健康満足および友人満足の評定もその実態を反映していた。

2-2. 変化なし高齢者の主観的幸福感３つの尺度からみた変化と世帯との関連

つぎに尺度に関する時間的経緯を1994年調査と2000年調査との差異から検討してみよう。どの尺度が２時点間で上昇あるいは低下しているのだろうか,また世帯との関連ではどうなのだろうか。

尺度Ⅰ「老いに対する態度」は42名中上昇が15名（35.7%)，低下が18名（42.8%)，変化なしが９名（21.4%）であり，低下がもっとも多い。なかでも低下が顕著だったのは未婚子との同居世帯である（５名中４名)。

尺度Ⅱ「心理的動揺」は42名中中上昇が17名（40.5%)，低下が10名（23.8%)，変化なしが15名（35.7%）であり，上昇がもっとも多い。なかでも上昇が著しかったのは単独世帯（９名中５名）であった。

尺度Ⅲ「孤独・不満足感」は42名中上昇が11名（26.2%)，低下が４名（9.5%)，変化なしが27名（64.3%）であり，変化なしがもっとも多い。なかでも変化なしが顕著だったのは夫婦のみ世帯である（22名中17名)。このように，幸福感３尺度は時間的経緯によって，また世帯によって変化の現れ方が異なることが明らかになった。

では世帯変化した16名の対象者では上述の関連はどう現れるのだろうか。以下,個別の事例ごとに詳細に検討してみたい（表３)。

2-3. 世帯変化あり高齢者の主観的幸福感と満足感および健康状態と友人数との関連

事例１　A 子さん(75歳)

未婚長男（47）と同居から一人暮らし。

幸福感３つの尺度が全体の平均よりも高く，そのうち尺度Ⅰ「老いに対する態度」と尺度Ⅲ「孤独感・不満足感」(以下，尺度名は省略）は２時点間で上昇した。健康満足と友人満足が上昇し，健康状態は非健康から健康に改善し，友人数も多い。既婚の長女（51）は歩いて10分（以下，近居とする）に住み，夫（享年71）とは本人68歳の時に死別している。

事例２　B 子さん（68歳）

未婚次女（36）と同居から一人暮らし。

幸福感３つの尺度ともに全体の平均より高い。健康，友人満足が高く，実際に健康だが，友人数が大きく減少した。本人50歳の時に夫（享年51）と死別した。

事例　M 夫さん（74歳）

未婚長男（45）と同居から妻（71）と二人暮らし。幸福感の尺度Ⅰが２時点間で上昇し，３つの尺度がともに全体の平均よりも高い。友人満足が高いが，非健康で友人数も大きく減少した。

事例　N 夫さん（68歳）

未婚長女（34）との同居から妻（60）と二人暮らし。幸福感の３つの尺度が２時点間で変化し，いずれの尺度も全体の平均よりも低い。満足感はともに上昇し,非健康だが人数が少し増えた。介護を期待していた娘は結婚し,道外に転居した。

事例　C 子さん（76歳）

未婚長男（45）と同居から夫（78）と二人暮らし。幸福感３つの尺度が２時点間で変化し，全体の平均よりも低くなった。健康満足がきわめて低く，実際に非健康である。しかし，友人数に影響はみられない。

事例　D 子さん（76）

夫と孫の同居から夫（77）と二人暮らし。幸福感３つの尺度が変化し，いずれも全体の平均よりも低くなった。健康満足が低く，実際に非健康である。友人数も大きく減少した。本人の非健康に加え，夫もまた非健康からだれかの介助が必要に変化した。調査時には他人にお金を騙し取られ宗教上の友に支えられていると述べていた。

事例　P 夫さん（66）

妻と自分の母と同居から妻（60）と未婚次男（26）との同居。幸福感の尺度Ⅰが低下したが，尺度Ⅱと尺度Ⅲは全体の平均よりも高い。健康だが友人数は大きく減少し，友人満足の上昇を反映していない。

事例　E 子さん（69）

夫と二人暮らしから夫（66）と未婚長男（28）と同居。幸福感の尺度Ⅰと尺度Ⅱは２時点間で上昇し全体の平均よりも高くなったが，尺度Ⅲは逆に大きく低下した。健康だが，友人数も大きく減少した。尺度Ⅲ「孤独感・不満足感」が低下したのは，同居になった長男の病気療養に伴い友人とのつきあいが減ったという介護の問題があると思われる。

事例　F 子さん（75）

表３．世帯変化あり高齢者の主観的幸福感，健康満足と健康状態，友人満足と友人数の変化

No・事例	age	世帯の変化	尺度Ⅰ 老いに対する態度	尺度Ⅱ 心理的動揺	尺度Ⅲ 孤独・不満足	健康満足	健康状態の変化	友人満足	友人数の変化
全体平均	72.6	1994　→　2000	1.49→1.47	1.66→1.71	183	3→2.87	1994→2000	3.53→3.5	1994→2000
A子さん	75	未婚子と同居→単独	1.25→1.75	1.8	1.33→2.00	2→3	非健康→健康	3→4	19
B子さん	68	未婚子と同居→単独	1.75→1.67	2	2	4	健康	4	5→1
M夫さん	74	未婚子と同居→夫婦のみ	1.25→1.67	2	2	3	非健康	4	10→4
N夫さん	68	未婚子と同居→夫婦のみ	1.75→1.25	1.20→1.00	1.33→1.67	2→3	非健康	3→4	3→5
C子さん	76	未婚子と同居→夫婦のみ	1.00→1.25	1.6	1.67→1.33	2→1	非健康	3	6
D子さん	76	夫・孫と同居→夫婦のみ	1.25→1.00	1.40→1.20	2.00→1.00	2	非健康	3	6→2
P夫さん	66	妻・母と同居→未婚子と同居	1.50→1.25	1.8	1.67→2.00	3	健康	3→4	6→1
E子さん	69	夫婦のみ→未婚子と同居	1.33→2.00	1.20→1.75	2.00→1.33	3	健康	3	17→0
F子さん	75	夫婦のみ→未婚子と同居	1.25	2	2	2	非健康	3	9→7
Q夫さん	70	夫婦のみ→既婚子と同居	2	1.80→2.00	2	4→3	非健康	4→3	6
R夫さん	77	夫婦のみ→既婚子と同居	2.00→1.75	1.80→2.00	2	4	健康→非健康	4	0→4
G子さん	73	未婚子と同居→既婚子と同居	1.25	1.60→1.40	1.67→2.00	4→2	非健康	4	2→3
H子さん	74	未婚子と同居→既婚子と同居	1.5	2.00→1.80	2	4→3	健康→非健康	4→3	9→0
I子さん	70	単独→孫と同居	1.75→1.50	2	1.67→2.00	4	健康	4	9→3
J子さん	68	夫婦のみ→孫と同居	1.00→1.25	1.4	2	3→4	健康	4	1→6
K子さん	83	夫婦のみ→孫と同居	2.00→1.25	1.00→1.60	2	2	非健康	Na→2	1→3

注１：→は1994年から2000年の世帯変化、主観的幸福感，健康満足と健康状態，友人満足の友人数の変化を示す。
注２：No16の1994年Naは無回答であったことを示す。

夫と二人暮らしから夫（76）と未婚長男(39）と同居。幸福感３つの尺度に変化はないが，尺度Ⅰが全体の平均よりも低い。健康満足が低く，実際に非健康である。友人数に大きな減少がない。

事例　Q夫さん（70）

妻と二人暮らしから妻（67）と既婚次男(38)，孫２人と同居。幸福感の３つの尺度がともに全体の平均よりも高い。非健康だが，趣味が多く，友人数に変化はない。次男の妻は同居から除かれているため，別居か離婚も想定される。

事例　R夫さん（77）

妻と二人暮らしから妻（72）と既婚長男(42)，長男の妻，孫２人と同居。幸福感３つの尺度および健康，友人満足すべて全体の平均よりも高い。健康から非健康に変化したが，友人数は増えている。

事例　G子さん（73）

未婚長女（51）と同居から夫（77）と既婚三女（46)、孫２人と同居。幸福感３つの尺度のうち尺度Ⅰと尺度Ⅱが全体の平均よりも低く，尺度Ⅲが高い。健康満足が低下し，実際に非健康である。しかし，友人満足が高く友人数に変化はない。長女の代わりに三女が無配偶となって同居に変化した。

事例　H子さん（74）

未婚次男（48）と同居から既婚長男（50）と長男の妻，孫３人と同居。幸福感３つの尺度のいずれもが全体の平均よりも高い。健康から非健康に変化し，友人数も大きく減少した。

事例　I子さん（70）

一人暮らしから孫と同居。幸福感３つの尺度はいずれも全体の平均よりも高い。健康，友人満足が高く，健康だが，友人数は大きく減少した。３人の娘はいずれも近居である。夫の死後（享年45）アパートを経営する。

事例　J子さん（68）

夫と二人暮らしから夫（74）と孫（次男の子，15歳）と同居。幸福感３つの尺度のうち尺度Ⅰと尺度Ⅱは全体の平均よりも低い。健康満足は上昇し，実際に健康である。また友人満足も高く，友人数も増加した。次男（44）の先妻の死亡により再婚したが孫が新しい母になじめず，同居になる。

事例　K子さん（83）

夫と二人暮らしから夫（88）と孫２人と同居（長女の子)。幸福感３つの尺度のうち尺度Ⅰと尺度Ⅱが全体の平均よりも低い。健康満足は低く，実際に非健康である。友人満足も低いが，友人数は増えた。

2-4. 変化あり高齢者の主観的幸福感３つの尺度からみた変化と世帯との関連

尺度Ⅰ「老いに対する態度」は16名中上昇が５名（31.2%），低下が７名（43.8%），変化なしが４名（25.0%）であり，世帯変化なしと同様に低下がもっとも多い。なかでも低下の幅が大きかったのは未婚子との同居から夫婦のみ世帯に変化した事例N夫さん（1.75→1.25)と夫婦のみ世帯から孫との同居に変化した事例K子さん（2.00→1.25）である。

尺度Ⅱ「心理的動揺」は16名中上昇が４名(25.0%)，低下が４名（25.0%），変化なしが８名（50.0%）であり，変化なしがもっとも多い。未婚子との同居から一人暮らしに変化した事例A子さんと事例B子さんは変化せず，全体の平均よりも高い。同じ傾向は未婚子との同居世帯へ移行した事例P夫さん，事例Fさんにもあてはまる。既婚子との同居世帯へ移行した事例４名（Q夫，R夫，G子，H子）は上昇から低下に変化した。

尺度Ⅲ「孤独・不満足感」は16名中上昇が５名（31.2%），低下が３名（18.8%），変化なしが８名（50.0%）であり，変化なしがもっとも多い。これは世帯変化なしと同様である。

以上みてきたように，世帯変化ありも世帯変化なしと同様，尺度Ⅰ「老いに対する態度」では低下がもっとも多かったが，世帯変化な

しでは未婚子との同居に，世帯変化ありでは孫との同居へ移行した事例にこれらの低下傾向がみられた。また，尺度Ⅲ「孤独感・不満足感」では世帯変化の有無にかかわらず変化なしがもっとも多かったが，世帯変化なしでは夫婦のみ世帯に，世帯変化ありでは既婚子との同居へ移行した事例にこれらの傾向がみられた。尺度Ⅱ「心理的動揺」では世帯における一貫性はみられなかった。

Ⅳ．結論と今後の課題

本稿では高齢者の主観的幸福感と満足感が世帯の変化の有無によって，また６年間という時間的な経緯によってどのように変化するのか，あるいはしないのかを探索的な方法によって検討した。その結果，以下の４点が明らかになった。

（１）主観的幸福感の３つの尺度は互いに強い相関があり，健康満足と友人満足とのあいだにも強い相関がある。

（２）幸福感が高いグループは健康，友人満足が高く，実際に健康で友人数も多い。とくに世帯変化なし夫婦のみ世帯の男性に多い。

（３）６年間のあいだに世帯変化の有無にかかわらず尺度Ⅰ「老いに対する態度」は他の尺度よりも低下した。世帯変化なしでは未婚子との同居にみられ，世帯変化ありでは子ども側の事情が関連していた。

（４）幸福感の低いグループは，世帯変化あり夫婦のみ世帯に属し，かれらの満足感と実態には乖離があった。

本稿は1994年調査が札幌市の住民基本台帳をもとにした確率比例抽出法によるため本稿の６年後の調査も客観的なデータに基づくという利点があったが，回収率が低いことから調査非協力をも代表するわけではないという制約もある。しかしながら，これらの一人ひとりを事例的な手法によって詳細に検討し，同時に統計的な方法も組み合わせることによって今後の課題もみえてきた。たとえば，尺度Ⅰ「老いに対する態度」は時間の経過とともに低下する傾向がみられたが，尺度Ⅲ「孤独感・不満足感」は予想に反して変化はみられなかった。フランスの哲学者であり思想家でもあるシモーヌ・ド・ボーボワール（A，シュヴァルツァー，1994）は「老い」という現実を人生の最後まで受け入れることが困難であったと述べている。日本では「老い」は孫との周辺的な役割をとおして受け入れることを可能にする文化的装置があったのではないか。孫との日常的なかかわりが少なくなっている今日では「老い」を認識することが難しいのかもしれない。人生80年といわれて久しいが，高齢者にとって「老い」をどのように受け入れていくか，幸せな「老い」をどう設計するかは今後の課題である。

付記　本稿は「2003年度北星学園大学特別研究費による研究」である。

［注］

⑴　詳細については小田（2004）を参照のこと。

⑵　６年前の調査の対象者は，札幌市の中央区，豊平区，白石区より確率比例抽出法によって抽出された60歳以上80歳以下の男女であった。調査はすべて直接面接法を用い，抽出した405人のうち回収された有効票は255票である。追跡調査ではこれら255名すべてに調査したい旨のお願いと返信用はがきを同封し，調査の了解を得た対象者に直接面接による調査を行った。有効票は69票であり，回収率は27％である。なお協力を得られなかった内容については，無回答132ケース，本人死去８ケース，病弱・入院治療16ケース，多忙７ケース，その他・不明23ケースとなっている。

⑶　改訂 PGC モラール・スケールの質問は，「現在

のあなたのことについてお尋ねします。今の生活，これまでの生活について，あなたはどのような考えをお持ちでしょうか」と尋ね，回答は「はい」と「いいえ」の２件法，満足感では，「あなたは次のことがらにどのくらい満足していますか」と尋ね，「ひじょうに満足」，「どちらかといえば満足」，「どちらかといえば不満」，「ひじょうに不満」の４件法で，点が高いほど肯定的反応である。

(4) 改訂 PGC モラール・スケールの詳細については，直井，2001，pp14を参照のこと。

(5) 改訂 PGC モラール・スケール17項目の因子分析（バリマックス回転後の因子負荷量は．40以上）では２時点ともに６つの因子解を得たが，因子間における質問項目で共通していたのは３項目のみであった（h と f の項目は第一因子，k の項目は第三因子)。

(6) そこで上述のモラール・スケールを Lawton（1972）の文献に従い，５つの因子解に分け1994年と2000年別々に相関分析を行った。その結果，第一因子と第四因子は２時点ともに他の因子とは相関が低いか無相関であったので分析から除き，相関が比較的高いと思われた第二因子と第三因子，第五因子を SAS の SET ステートメントで縦に結合し，合成変数とした。なお，Lawton（1972）が示す５つの因子解のうち，第一因子の３項目（i，k，l）と第四因子の２項目(j，n)は分析から除いている。尺度化は以下に示すとおり。尺度Ⅰ：「老いに対する態度」（４項目）ａ．自分の人生は年をとるにしたがって，だんだん悪くなっていくと思いますか。ｂ．あなたは去年と同じように元気だと思っていますか（逆転)。ｆ．あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。ｈ．年を取ることは若いときに考えていたより，よいと思いますか(逆転)。尺度Ⅱ：「心理的動揺」（５項目）ｄ．最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか。ｇ．心配だったり，気になったりして眠れないことがありますか。ｍ．前よりも腹をたてる回数が多くなったと思いますか。ｐ．物事をいつも深刻に考える方ですか。ｑ．あなたは心配事があると，すぐおろおろする方ですか。尺度Ⅲ：「孤独感・不満足感」（３項目）ｃ．さびしいと感じることがありますか。ｅ．家族や親戚や友人との行き来に満足していますか（逆転)。ｏ．今の生活に満足していますか（逆転)。

［文献］

A. シュヴァルツァー，福井美津子訳，1994,『ボーヴォクールは語る』，平凡社.

布施晶子, 2002,「北海道の家族：第２次世界大戦後の変化を中心に」『現代社会学研究』(15)：27-61.

古谷野亘・西村昌記他, 2002,「都市男性高齢者の社会関係」『老年社会科学』(22)：83-88.

古谷野亘・安藤孝敏編著, 2003,『新社会老年学』ワールドプランニング：109-163.

Lawton MP，1972，"The dimensions of morale. In Kent DP，Kastenbaum R，Sherwood S（eds.）: Reseach Planning and Action for the Elderly ; The Power and Potential of Social Science，144-165，Behavioral Publications，New York.

Lawton MP，1975，"The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale ; A revision." Journal of Gerontology，(30);85-89.

直井道子，2001,『幸福に老いるために』，勁草書房.

小田利勝，2004,『サクセスフル・エイジングの研究』，学文社.

三谷鉄夫・加藤喜久子・平賀明子他，1995,「都市高齢者の社会的サポートネットワークに関する研究」『高齢者問題研究』(11)：61-77.

高橋勇悦・和田修一編，2001,『生きがいの社会学―高齢社会における幸福とはなにか―』，弘文堂.

竹内　啓監修，1999,『SAS によるデータ解析入門』［第２版］，東京大学出版会.

[Abstract]

The Relationship between Changed and Unchanged Household Construction and Subjective Well-Being and Satisfaction among the Elderly: Six Years Later

Akiko HIRAGA

This paper investigates the changes 6 years after our study "Social Support Network of the Urban Elderly"（1994）and explains how Subjective Well-Being（SWB, Lawton MP, 1975: Scale 1 Attitude Toward Own Aging, Scale 2 Agitation, Scale 3 Lonely Dissatisfaction）and satisfaction were correlated, and how the level of SWB was influenced by changes in the health condition and friendships in both changed and unchanged households. We focused on 58 subjects, and the results were as follows:（1）Three scales of SWB were highly correlated with each other, and these scales were also highly correlated with health and friendship satisfaction.（2）The high SWB group had high scores in health and friendship satisfaction. In fact, they had good health and many friends, especially males in the couple-only unchanged households.（3）Regardless of changed or unchanged households, scale 1 "Attitude toward one's own aging" was lower than that of the other scales six years later. In the unchanged households, a decline was found for those living in unmarried-children households, and in the changed households this was related to changes in their children's situations.（4）The group with the lowest scales in SWB belonged to couple-only in the changed households. A gap between their satisfactions and actual conditions was found in these groups.

Key words : Changed and Unchanged Households, Subjective Well-Being and Satisfaction, Elderly